

# 朝鮮王族の「七言対句」公開

## 館山「小谷家住宅」で

### 26代高宗のおい 王位継承争い 日本亡命



小谷家住宅で展示中の「七言対句」と当主の小谷さん（館山市布良で）

朝鮮王族の李塔鏞（イ・ダゴン）の書「七言対句」が、館山市布良の市指定有形文化財「小谷家住宅」で公開されている。書は2年前、小谷家住宅で見つかり、その後の調査で、王位継承争いに巻き込まれた李が1899年（明治32年）から8年間日本に亡命し、同市北条（当時北条町）で暗殺されかけ

たことがわかった。館山市立博物館の岡田晃司学芸員（58）によると、李は朝鮮王朝第26代皇帝の高宗のおい。七言対句は「江上晴烟人似樹樓中紅燭妓如花 韓国王塔鏞」と書かれ、名前と雅号「石庭」の印が押さ

れている。大河の上の明るい霞の中に立つ人は樹に似ている。楼閣にゆらめく紅い灯の中に立つ遊女は花のようだ」という内容。李の書は鋸南町の日本寺にもある。町史によると、1902年6月に書かれた「乾坤山」の扁額で、乾坤山は日本寺の称号の「山号」に当たる。日本寺の住職と同郷だった人物が揮毫を依頼し、奉納した。岡田学芸員は七言対句について、別人が書いた可能性を否定し、「日本寺のように頼まれて書くことがあった。一部しか知らない亡命者の偽作を書くことは考えにくい」と指摘している。

扁額を書いた同じ年、李は刺客に襲われる。1902年11月12日付「東京朝日新聞」によると、同5日午前11時頃、北条町八幡俱樂部で男が面会し、帰りがけに短刀で刺そうとしたが、家人に取り押さえられ、殺人未遂容疑で警察に逮捕された。男は東京から船で入り、警察も尾行中だったという。明治期に政治亡命し、命を狙われたことは、小谷家住宅で七言対句を見つけたNPO法人安房文化遺産フォーラムの愛沢伸雄代表（64）が、当時の外務省資料や、警察の報告書などを国会図書館で調べ、裏付けた。愛沢さんは「神戸でも、朝鮮王族関係者の同時暗殺が亡命者内で計画されていた。李は館山で宿舎を転々と変えていた」と語る。

小谷家当主の小谷福哲さん（65）は「なぜ小谷家にあるのか、どんな気持ちで書いたのか知りたい。波乱万丈、数奇な運命をたどった李が、その後、無事王族に復帰できたのが救い」と話している。

小谷家住宅は、洋画家・青木繁が「海の幸」を描いた場所として知られ、七言対句は、小谷家修復後の「青木繁『海の幸』記念館」に展示中だ。